

近世ヨーロッパ人は鍼灸をどう捉えたのか — 近世期における日欧の医学交流 —

講師 ヴィグル マティアス（文学部都市文化デザイン学科 准教授）

近世ヨーロッパでは 2度の鍼灸ブームがありました。1回目は17世紀、日本から初めて鍼灸が紹介されたとき。特に「痛風の治療法」として注目されて、ヨーロッパの医師たちは大きな関心を示しました。2回目は19世紀初頭、フランスの病院で「痛みの治療法」として鍼術が広く使われるようになったときです。ここでは、なぜヨーロッパ人は鍼灸に興味を持ったのか、どのようにしてこの東洋の治療法が伝わり、受け入れられたのかを説明したいと思います。

ご都合の良い時間に、お好きな場所でオンデマンド講座を受講してみませんか。
公開期間中は何度でもご視聴いただけます。
受講方法は、申込フォームにお知らせいただいたメールアドレスあてにご案内します。
（申込期限 2025年5月21日（水）13時）

二松学舎大学 公開講座

お問い合わせ 二松学舎大学 地域・産学連携室 s-renkei@nishogakusha-u.ac.jp

<申込フォーム>



オンデマンド
配信公開期間

2025年3月18日（火）10時
～
2025年5月21日（水）16時

渋沢栄一が日本の近代金融制度の基礎を築いた重要な人物であることは論を俟たない。幕末期に一橋家播磨国領における藩札の新規発行という実務経験を積んだ上で、さらにヨーロッパで学んだ西洋の銀行制度や会計システムを日本に導入した。1873年には日本初の近代的銀行である第一国立銀行の設立に携わった。根幹をなす思想としては、「論語と算盤」、「道徳経済合一説」の考えを掲げ、道徳と経済との調和を重視した経営哲学を実践した。この考えは、本学の創設者である三島中洲の「義利合一論」と軌を一にするものであり、実際に深い交流のあった両者の関係性が窺える。実業界では株式会社制度の普及に尽力し、特に、それまでの日本にはなかった株式制度による資本調達方法を広め、日本商工会議所の設立を行うなど商工業の発展を金融面からだけでなく、制度設計者・経営者の立場からも関与・支援を惜しまなかった。この渋沢の足跡を、特に金融に関する側面から概説する。

講師 今井 悠人（国際政治経済学部国際経営学科 准教授）

渋沢栄一と近代金融制度 — 方谷、中洲との接点を踏まえて —